500年後の人々の誇りになる遺産を生み出す

集落構想プロジェクト「あしたの畑」

芸術文化活動を核とする非営利団体 NPO法人TOMORROW（理事長 徳田佳世／副理事長 徳山豊、西沢立衛／理事 中田英寿 ）が主催する「あしたの畑」は、アートと食を通して人が集まるきっかけと学ぶ場を生み出し、土地が持つ自然の財産に気付く機会を提供していく集落構想プロジェクトです。
京都市内と京丹後市間人（たいざ）を拠点に、その土地の材を再評価し、集落の中で豊かに生きていくノウハウを育むシステムを構築していくことを最重要視しています。

代表の徳田佳世は、地中美術館（2004年開館）、豊島美術館（2010年開館）と、瀬戸内海を日本における現代アートの巡礼地とする一連のプロジェクトに中心となって携わったのち、京都に移住。京都市内の町家を改修した「世｜SEI KYOTO」（設計：西沢立衛）をつくり、建築家の橋詰隼弥とともに、料理人、職人、アーティストと協同でものづくりに取り組みます。

2020年から京丹後市間人にも拠点を構え、500年後の人々の誇りとなる遺産を生み出せるよう、日本に暮らすこと、世界が平和であるために文化芸術活動を通して貢献することの意義を思考し、アート・工芸・建築・食の分野から集落環境を提案する活動を行っています。

写真: 野口里佳

ART SITES

あしたの畑は、現代のライフスタイルや美意識をアップデートする試みとして、土地に根ざす建築に人が暮らし続けることについて取り組んでいます。

SEI TAIZA

築60年の丹後ちりめん工場として使われていた建物を、織物の新たな可能性を探る間人初のアートギャラリーとして再活用しています。

住所：京丹後市丹後町間人3329
イベント会期中のみ公開

間人レジデンス

間人レジデンスは、自然の素材を最大限に活かしながら、現代の建築を感じるアートハウスであり、居住空間の提案です。

住所：京丹後市丹後町間人3332-2
イベント会期中のみ公開

間人スタジオ

土地の工法、素材と現代の思考、技法で、今とこれからのサステナブルな居住空間を作り上げる実験的な家屋。木工職人 中川周士による「木の部屋」など、建築と工芸を結ぶ新たな試みを行っています。

住所：京丹後市丹後町間人2854
イベント会期中のみ公開

宮のあしたの畑　/　Field of Stars

リジェネラティブなアート、工芸、建築作品の創造の場となる常設作品「Field of Stars」のほか、建築家 西沢立衛による最小建築　「納屋」、陶磁器作家 新里明士と加藤貴也による「あしたの畑窯」を展示。

住所：京丹後市丹後町宮249
常時公開

世｜SEI KYOTO

建築家　西沢立衛が、築100年を超える京都の町家の伝統に向き合いながら職人たちとつくり上げた手仕事の結晶。NPO法人TOMORROWの京都市内の拠点兼住居。

Instagram　@sei_kyoto

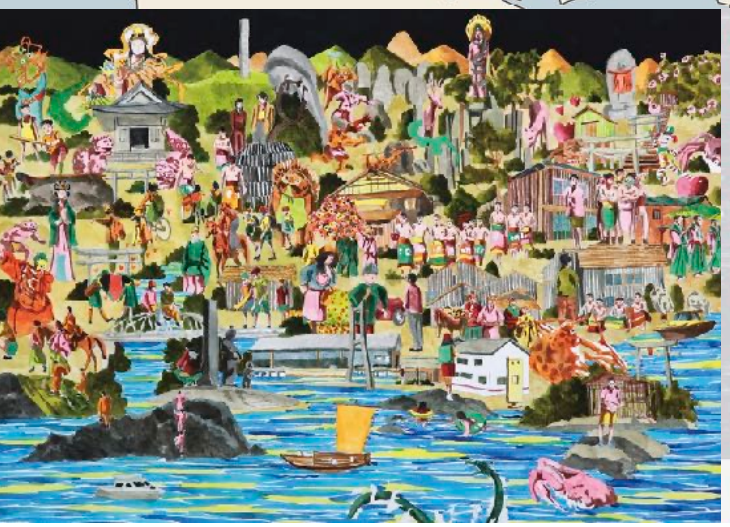
住所：京都市内（非公開）
イベント会期中のみ公開

アクセス

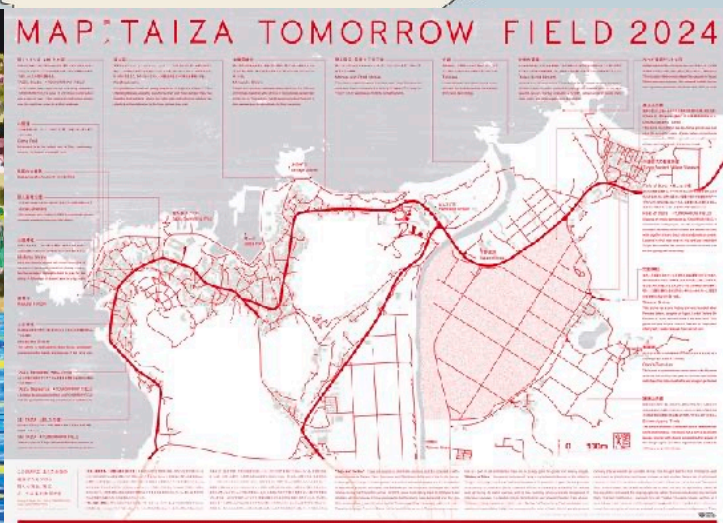
京都市を訪れる外国人観光客は右肩上がりで増えており、オーバーツーリズムが問題視される中、京都を頻繁に訪れる外国人のために、周辺地域に新たな観光地や魅力を創出することは重要だと考えている。

丹後は京都市内から車で約2時間。近隣の天橋立や伊根の舟屋、城崎温泉などは、いずれも車で1時間圏内にあり、京都市内に飽きたインバウンド需要に応え、中長期滞在するにはとても良いポテンシャルを持っている。

奈良に都が置かれる以前、丹後はひとつの巨大な王国であり、近隣諸国や住民とのダイナミックな文化交流によって、当時の日本文化の最先端を担っていた。



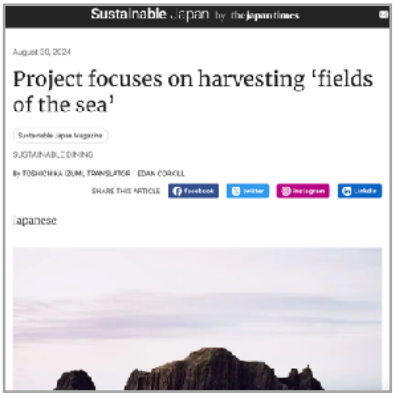
Sangho Noh “Taiza”



間人アートマップ

プレスアーカイブ

2023.5.28　THE WORLD OF INTERIORS “A BETTER TOMORROW”
2023.9.9　designboom “tomorrow's 'field of stars' installation ponders environmental changes in japanese village"
2023.10.17　e-flux Agenda “Field of Stars”
2024.8.30　Sustainable Japan by The Japan Times “Project focuses on harvesting ‘fields of the sea’”
2024.9.3　APOLLO “The Apollo 40 Under 40 Craft in focus: Shunya Hashizume”
2024.11.9　VOGUE JAPAN “京丹後市間人にて「あしたの畑 2024年秋期」特別展が開催”



主な活動実績

2016年　世｜SEI KYOTO 内藤礼 展示
2019年　SEI-kitchen
2021年　雅楽間人公演「心田を耕す」
2022年　食とアートの祭典「ECHO あしたの畑ー丹後・城崎」、写真家・畠山直哉　展覧会「Taiza, Tango」
2023年　食とアートの祭典「ECHO あしたの畑ー丹後・城崎」、サムソン・ヤン（作曲）× LEO（箏）
2024年　食とアートの集落構想「あしたの畑 2024秋期」、企画展「Remedy」
　　レクチャー「リジェネラティヴ・アーキテクチャー：アンナ・ヘリンガー＋平田晃久」
　　cenci × 縄屋 コラボレーションランチ／ディナー
2025年　食とアートの集落構想「あしたの畑 2025春期」（予定）

2016年 内藤礼展示（|世｜SEI KYOTO）

畠山直哉「間人・丹後の風景」

中川周士「木の部屋」（間人スタジオ）

NPO法人 TOMORROW　／　あしたの畑

NPO法人TOMORROWは、芸術文化活動を核とする非営利団体。
「感動すること」を最上位の価値として定め、芸術文化活動を通し、豊かな心を育み、平和な国際社会を築く一因となることを目的とします。
2020年より京都北部の京丹後市間人地区にて開始した活動「あしたの畑」は、国内外で活躍するアート（建築・工芸などの表現を含む）と食のプロフェッショナルたちが、分野を超え、都市部では得られない地域の立場から、未来に引き継ぎたい日本の美しい景色を文化芸術的アプローチによって創造していくことを目指します。

NPO法人TOMORROW　BOARD MEMBERS

理事長	徳田佳世
副理事長	徳山豊、西沢立衛
理事	中田英寿

アドバイザリーコミッティ
福武總一郎、ミウォン・クウォン、
リシャール・ジェフロワ、マーカス・ハートマン、
テレジータ・フェルナンデス、エミー・ユ

ロゴデザイン　杉本博司（美術家）

あしたの畑 STAFF

ディレクター	徳田佳世
プロジェクトマネージャー	橋詰隼弥
プロジェクトコーディネーター	岡本夏佳
インターン	若松晃平、関口知輝、上和田静、山本拓海
印刷物デザイン	窪田新
Website	田中義久、古庄果奈(centre)
広報	中川奈保、吉澤朋

Website	https://tomorrow-jp.org/tomorrow/
Online store	https://tomorrowfield.stores.jp/
Instagram	@tomorrow_field
Youtube	https://www.youtube.com/@tomorrowfield

取材・掲載に関するお問合せ　press@tomorrow-jp.org

間人への道

徳田 佳世

担当した豊島美術館が完成した2010年10月、開館2週間後に京都に引っ越してきてから、“工芸”に携わる人々との出会いと、彼らが情熱を捧げている技と心を理解したいという思いから、陶芸について勉強することから始めた。有田、伊万里、唐津、萩、砥部、益子と巡り始めると、やがてその原点となる琉球や李朝の歴史が気になり出し、旅と本や映像での勉強を重ねること数年。2016年に発行された「ゲンロン3号」で朝鮮半島の38度線、DMZでのアートプロジェクトを知り、ソウルから電車、そこからバスで白骨部隊の基地を訪ねた。目の前に広がるのは、果てしない広野。遠くの山頂に北朝鮮の基地が見える。近くには、鉄柵が二つの線を東西に描いている。

南側の木々も大地の色も北のそれと同じに見える。同じ民族だった人々がある日突然”別々に”なった心情を想像してみるだけで、胸が締め付けられる思いがした。　私は政治にも経済にも疎い。情熱を注いできたのは”アート”だ。人が祈りをこめ、手で自然の素材から自然に捧げる平和や安寧への想い。できることからはじめよう。同じ年の冬、韓国のアーティスト、ス・ドホに「アーティストが魂を削って紡ぎ出すアートが作られる状況を生み出すのが君の役割のように思う」という言葉に触発され、建築家の西沢立衛さん、教育者の徳山豊さん、実業家の中田英寿さん、そして恩人である福武總一郎さんの理解を得て、NPO法人設立の手続きをとり、認可された頃と時を同じくして、”あしたの畑”と名づけた集落構想の種が蒔かれた。　アートの精神の伝承は、テキストがあるわけではない。人とのめぐり合いと経験、現場をつくることが、20年先、50年先にも大切にされる、愛されるものを作る責任であり、使命だと感じていた。日本の風土ー自然と人との歴史と文化ーが世界からリスペクトされる風景を、これからを担う世代の若者たちに委ねながらともに作りたい、それには歴史をもつ土地で、縄文時代を思い起こさせる豊かな自然と人の暮らしの原風景が大切だ。

京都から奈良へ、和歌山へ、三重へ、滋賀へと旅をし、理想の土地を探し求めて、2020年の夏、京都の北、大成古墳群を訪れた。剥き出しの石室、4世紀ぐらいなのだろうか？5世紀なのだろうか？海に向けてあらあらしく曝け出され組み合わされた石室は、海に向けて弔い、死後の世界を安らかにと願う人の気持ちが伝わってくるような景色だった。

かつて、人類が宇宙に暮らすこともやがてあり得ると漠然と捉えていた時に、火星に暮らすとどうなるか？ということについて調べ、仲間たちとともに勉強会を続けていた。しかし、火星の上の小さく閉ざされた空間の中で地上の暑さと寒さから逃れ、小さな窓から外を眺める暮らしは、限られた人のみに許され、地球人全員が対象ではなさそうな印象を持った。宇宙での暮らしの居住空間や集落のかたち、そこでのアートとは？と想像するのはそこで休止して、地球で暮らし続けるとはどのようなことか？空や海や山という、子どもたちが安心して暮らせる地球の美しさを続けていくために何ができるのだろう？と考え始めた先に、集落構想「あしたの畑」が生まれた。　アートが社会で循環するには、人が感動する心を耕せる、集落がある。

空と海がその祈りを受け入れるかのように、波が岬に押しよせては引く。ここ一間人（たいざ）と呼ばれる漁村に、アートの大切なものはすべてここにあり、ここから生まれると、ともに訪れた20代の橋詰隼弥と直感した。

2021